

入院第5日め—腹の異常を治すには

番外編—不況ってえことは

入院第6日め—研究

3

入院以来ずっと24時間の点滴を受けている。ヘパリンとかいう点滴は、1リットルほどの量を24時間ゆっくり落とし続けていかなければならないので、点滴棒の中ほどに点滴を制御する装置（輸液セット）が設置されている。その中で輸液チューブが通っており、センサーによってフィードバックされながら点滴が進行して行くという仕掛けになっている。この「輸液セット」が常に調子悪く、すぐにピピーピピーと「流量異常」を告げる警告音が鳴る。

やや山形なまりがある新山ナースが飛んできた。「おかしーなあ」と首をかしげて、ともかくも、「流量異常」を治してくれた。その直後に、ベッドに横たわっているぼくの耳元で彼女のお腹が「グー」と鳴った。彼女は黙っておればぼくも黙っていてあげたのに、新山ナースはつぶやいた。

「あ、私のお腹が鳴っている」
だから黙っているわけには行かず、
「あ、そいつはぼくが治してあげよう」
と言って、最中を1個進呈した。彼女がぼくのベッドから離れるながら、にっこりと
「また鳴ったらとんできますからね」
「えー？お腹が鳴るたびにとんできくの？」
主語を省略するとややこしくなる好例。

番外編—不況ってえことは

舞台は御なじみ、行きつけの駅前居酒屋の「サラリーマン」：カウンターは妙にガランとしている。赤木さんは元プロボクサーだった。相当に強く、バンタム級の世界タイトルに挑戦したが、惜しくも敗れた。今は職人風のサラリーマンをやっている。

赤木さんがかなり酔って、みんなに聞こえるよう演説を始めた。

「不況ってえことはどういうことかわかるか？」
コップをグーっとあおって、
「おれみたいなやつが、銀行強盗を考えるってことよ。コンビニかなんかに入って5万ぐらいふんだくって、人を殺して捕まるやつがいるが、ありゃ、最低だよ。銀行だよ。銀行。
おれが直接銀行強盗をやると、目立つだろう？

だから人を雇うんだ。失業対策にもなるってわけだ。ガスバーナーなんか使えるやつ一人。金庫を焼き切るんだ。それも半端なやつはだめだ。思いっきり腕のいいやつを雇う。それから鍵屋の腕の立つやつ。警報機が鳴るといけねえから半導体かなんかがよく分かるやつ。逃げるのが肝心だから車のハンドルがうまい運転手。こういうのを4人ばかり雇うんだ。みんな腕っこきだから人件費が大変だ。

そうやって銀行に入って、金庫を焼き切って鍵屋がその中を開けるだろう？

すると不況で中に現金が人件費分も入っていねえ。やんなっちゃうよ。こういう事を言うんだよ。不況ってえのはよ」

入院第6日め—研究

北ナースが風呂場でぼくの洗髪をやりながら、尋ねた。

「島岡さんはどうして少女漫画が好きなんですか？」

「少年漫画に比べて、少女漫画は、人間の描きかたが細やかでしょう？それに、人間の価値観が揺らいで、人間関係が複雑に変化していく様子がとてもよく研究されていてね……」

「あ、そう、そうなんです。わたし佐々木倫子さんの『おたんこナース』を読んで試験勉強したんですよ。え？あれは『動物のお医者さん』だったかな？看護学校の微生物学の授業がつまなくて、あ、経済学も習ったんだけど、それがもっとつまなくて、あ、ごめんなさい。それで微生物学を赤点取ったんですよ。教科書読んで眠くなるでしょ？そこで『おたんこナース』を一所懸命読んだんですよ。そしたら単位が取れちゃったんです。佐々木倫子さんとかシナリオを書いている人とか、なんかすごく研究しているんですよ。わたし本当に役に立ったなと思って……」
ぼくは心中

「……その研究とちょっとしがうんだが……」
と思った。それ以後、北ナースはぼくを見ると、漆原教授のことを言い、ぼくは「君を見ると」おたんこナースに見えるよ」と言い合うようになった。